
君の空、僕の雨。

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の空、僕の雨。

【Nコード】

N7884A

【作者名】

アキ

【あらすじ】

最終兵器彼女の世界に生きる人たちの物語。

1章 平凡な日々

0、

この通知が来ないことを祈っていた。

いや別に神様を信じてるわけじゃないんだけどさ、

――「あなたの御子息は兵士として徴収されることとなりました」――

――運命てのがまさかこんなにも残酷だなんて思いもしなかったんだ

1
――1

夏休みも終わり、まだけだるいような暑さが教室に残っている。
そんな中でかったるい授業をうけるのはひどく退屈で、俺はそんな

状況から少しでも逃れるためにわずかな睡眠をとろうとしていた。

『…シ…ゲ。』

「んー？」

『シゲ！』

「ん…」

『ねえシゲ……………いい加減起きろ！このちび！！！！』

まったく…なんでこの女はいつも俺のわずかな幸せの時間を邪魔するんだ。

シゲ「ったくなんなんだよチカ。しかもちび言うな」

チカ「ちびなもんはちびでしょ。現実を受け入れなさいよ（笑）」

シゲ「それでもおまえよりは背高いわ、このまな板胸！！」

チカ「な！！！うわーセクハラだ。さいってえ！」

シゲ「なにが最低だ。ホントの事言ってるだけだろ」

チカ「くうくうしかも背だって私と…」

教師「そこ！うるさいぞ！集中しろ。集中！」

このいつもいつも絡んでくる隣の席のこの女はチカ。

別に家は近くないんだけど小学生のころからずっと同じ学校で腐れ縁っていったら腐れ縁の仲だ。

背は162cmで俺と同じ位、茶のショートカットで顔は俺から見たら普通なのだが周囲の男共の中には「かわいい」と言ってる奴もいたりする。

最近気にしてるのは胸の小ささ、——俺が身長の高さを気にしてるみたいに。

ちなみに今キレた教師はマエダ。学校1の古株で数学担当。あだ名

は「マエじい」。
学年主任でキレやすさ、授業のかったるさも学校で1、2を争うと思う。

てか今俺が怒られてまでやらされている数式や計算なんて残りの俺の人生の中のどこで役に立つことがあるんだろうか
だって数学のΣなんてあきらか日常生活で使う機会なんてないだろ？

結局チカがなんで俺を起こしたのかわからなかったし…

と、まあ何に不自由してるわけじゃないし、
特別めっちゃくちゃ楽しい事があるわけでもない。

まあいわゆる平凡な高校生活を過ごしてるんだと俺はそう思っている。

——そうこの頃はこんな日々が普通だと思っていたんだ——

1—2

「まったく見せつけてくれるねえ、相変わらず」

シゲ「だからそんなんじゃないやねえって前から言ってるんだろが」

数学が終わり売店から買ってきたパンを食いながら俺達はそんな話をしていた。

「マア、中学のころからの仲ですから？もう全然なれてますけどね？」

こんなことを言って茶化してくるいかにもスポーツ系って感じのこいつはカズヤ。

中学の頃ちよつとした事から話すようになり、今では俺にとって気のおけない奴になっている

カズヤ「はあく俺もお前みたいに嫁さんがいればなあ」

シゲ「だから違うっての、てかどうなのよマ・ド・カさんとは？」

カズヤ「バ、バカ！どうなのよ？ってマドカさんはただのOGで…
…」

カズヤはこういう話で茶化すと耳が真っ赤になる癖がある。
わかりやすくてからかいがある奴だ。

（ちなみにマドカさんというのは2つ上のうちの部のOGでカズヤの
一目惚れ、そして初恋の相手である（笑））

チカ「はいはい、お二人さんとも仲良く青春トーク中に悪いけどお
話があるんですが」

カズヤ「お。お邪魔なら消えさせていただきますよ、奥さん」

チカ「一遍死んでみる？ バカなこと言ってないでこれ書いとい
てね」

そう言ってチカが渡してきたのはすでに学校名、目的の書かれた公用欠席用紙だった。

チカ「あとは名前書くだけでいいようにしてあるから、部活の時に渡してよ」

カズヤ「はいよ。もう大会も次の土曜かぁ。なんか実感ないなぁ」

チカ「そう。じゃあ、あなただけトレーニング厳しくしてあげましょうか？」

カズヤ「いやいや冗談ですよ美人マネさん♪」

チカ「まったく……ちゃんと書いといてよ。てかシゲもぼーっとしてないでなんか言いなさいよ！さっきもこのこと言おうとしてマエじいに怒られたんだから！」

シゲ「あ…ああわかった。書いとくよ…」

チカ、カズヤ「？」

シゲ（大会か……）

1—3

「ハッ、ハッ、ハッ」

息が苦しい。でも足はまだ疲れてない、昨日よく寝なかったせいかもしれない。

「ラスト1kmだよー」

少し離れた所でうちの部、陸上部のマネであるチカは楽しそうに俺達に向かって大声で叫ぶ。

「まったくこっちの気も知らないでなあ……」

俺の後ろにずっとついていたカズヤがそうもらす。

シゲ「まだ話せるならいけるだろ、少しペース上げるぞ。ほらマドカさんも来てるんだし（笑）」

カズヤ「……………おう」

（きつとこいつ今また耳が真っ赤になってるんだろなあ（笑））

『好きこそものの上手なれ』と人はそう言うけれど好きなことと得意なことは違う。俺はそう思うんだ。

去年の俺の成績は個人地区2位、部全体で臨んだ駅伝は第4区の区間賞を取っている。

周りは俺をすごいと褒めるけど俺にとってマラソンは、走るということはいつの間にか苦痛以外の何物でもなくなってしまった。

きつと大会が憂鬱なのもそのせいだろう。

「ハイ、これ」

走り終わり休んでると突然冷たいものが頭の上にのせられる。振り向くとチカがポカリをもって立っていた。

チカ「タイム3秒上がったよ、これなら大会も大丈夫そうね。あ、それと飲み終わったら1年の面倒みてあげて」

シゲ「はあ？なんで俺がなんだよ」

チカ「私は色々忙しいの！ほらほら頼みますよセンパイ」

話し終わるころにはストレッチの終わった1年達が俺の前に集まってきた。

もう俺にはやるしか道はないらしい；

俺はストップウォッチをチカから受け取ると

シゲ「ほら1年。まずはトラック5週15分でやってこーい！言っとくが俺のメニューはきついぞー」

？「でも調子悪くなったらすぐ言うのよー！」

シゲ「あ。マドカさんすか、ちーっす」

マドカ「ふふ、ちーっす。またタイム上がったんだって？すごいじゃない」

シゲ「それだったらカズヤもっすよ。今に俺も追い抜かれるんじゃないすかね？」

マドカ「ね。みんな大会前ではりきってるのよね」

シゲ「はは……そうですね……」

マドカ「……」

カズヤ「よう！シゲえ！またタイム上がったんだろ！？」

シゲ「まあいちような」

マドカ「けどカズヤ君も上がったんでしょ？」

カズヤ「まあ一応っす；大会近いっすからね、がんばらないとっす
！！」

さて、俺はここでおいとましとくかな

がんばれよ、カズヤ（笑）

いつもと変わらない部活。
いつもと変わらない1日。

ただ気になったのはやかましい程飛んでいるTVやゲームで見たことあるような戦闘機のような形の飛行機と、いつもベンチに座っているだけの顧問のマエじいがその光景を俺達が見たこともないような悲しい目で見つめていたことだ。

1-4

昨日札幌で空襲があった。

5万人程の人がその空襲で死んだらしい。
5万っていう数は数字としては理解できるけど実際どれ位の大きさ、多さなのかは俺では理解できない。

きつとそれが俺自身この事実をリアルに受け止めてない理由なんだろう。

ニュースによると（どこまで信用できるかわからないが）もうけっこう前からこの国では違う国とのイザコザが絶えなかったらしい。それでもこの国は最初は話し合いでの解決をのぞんでいたらしいのだが、結局はこのような結果になってしまったというわけだ。

「おーっす どうしたよ朝っぱらから暗い顔して」

「お前は逆に朝っぱらから元気いいなあ、カズヤ」

「まあ今日も部活だからな、朝から元気なかったらもたねえぜ。てか札幌の爆撃のニュースみた？やばくね？」

「ああ、見たよ。時計台とかもぶっこわれちゃったらしいぜ」

「まじ!？」

けどこの時は、

この国のどこで爆撃がおきようが、

俺の生活には関係ないと思っていた。

きつと自然に他の国とのこの抗争もおさまると思っていた。

そう俺の毎日は

平凡に始まり、

平凡に終わる。

そう思っていた。

そう思っていたんだ。

今日も1日中戦闘機がうるさい。

ただ、ただそれだけだと思っていたんだ――――

2章 たばこと星空の夜

210

何故私なんですか？

誰か答えて下さい

何故私は泣かなくてはいけないのですか

何故私は好きなことをしてはいけないのですか

何故私なんですか？

今でもわかりません

私は何か悪いことをしてしまいましたか

人の怨みを買うようなことをしてしまいましたか

何故私だったんですか？

誰か答えて下さい

私はただ好きなことをしていたいだけだったのに

努力も欠かさなかったのに

何故私なんですか？

何故、神様はこんなにも私に残酷なんですか？

2—1

「カチッ」

静かな場所でのライターの音はよく響く

今日で札幌空襲から1週間がたった。

2日前に箆口令が出てマスコミも騒がなくなり俺の周りも少しずつだけどまるで何もなかったかのように以前の日常に戻ってきている。

その夜、俺は親に自主練と嘘をつき家から少し離れた公園のベンチでたばこに火を点けていた。

たばこを始めたのは去年の夏、理由なんてものは特になくてただのカッコつけのために始めたと言っても言い過ぎじゃない気がする。

いや、もちろんこれが運動選手にとって致命的になることも知っているんだけど

「シゲ…くん？」

(?!)

俺はとっさに火を消すと声のした方を向いた

「やっぱりシゲくんかぁ」

そこにはトレードマークである少しオレンジがかった髪を後ろで束ね、Tシャツにジャージといったラフな格好のマドカさんが立っていた。

マドカ「こんなところで何やってんの？　ってもう答えがわかってる質問聞くのは意味ないか」

シゲ「……………なんでマドカさんはこんなとこにいるんすか？」

マドカ「え？　私の家、この公園の近くなんだよ。知らなかった？　今はちよつと買い出しにでてきたとこ」

シゲ「そうなんすか…」

マドカ「うん」

シゲ「……………それで、できれば部活の奴等にはこのこと言わないでおいてくれないすか？」

マドカ「うーん、別にもともと言うつもりなんてないよ」

シゲ「え？」

マドカさんは少し笑うと俺の隣に座った。

マドカ「まだ高校生だもんねー、悪いことしたくなる気持ちもわかるよお」

シゲ「いや、別に俺はそんなじゃ……」

マドカ「ただ少し驚いただけだよ。まさかウチの陸上部のエースのシゲくんがたばこ吸ってるなんてね。」

シゲ「そうっすね……………陸上部なのに……」

マドカ「……………ねえ」

シゲ「……………?」

マドカ「シゲくん陸上嫌いでしょ?」

シゲ「え?」

マドカさんの顔は笑っていたけれどその声は本気だった

シゲ「……なんでそんな風に思うんですか?」

マドカ「だってシゲくん陸上で走ってる時もタイムのびた時も大会で賞とった時も1回も笑ったことないんだもん」

シゲ「……………」

マドカ「で、どうなの?好きな、陸上?」

——もう、嘘なんかついても意味ないか

シゲ「……………嫌いっすよ」

——もういいや

シゲ「だって走るのなんて辛いし、苦しいし、はたから見たらカッコ悪いし、だいたい親もみんなも「もっとタイムのびるよ」とか「次は1位狙い?」とかまるで俺はいい成績とって当たり前みたいに……………」

マドカ「……………そっかぁ」

少しの間を空け彼女は言った。

マドカ「じゃやめたら? 陸上。」

シゲ「え……………?」

マドカ「嫌いなのに無理に続ける必要なんてないよ」

俺を見るマドカさんの目は真剣だった。

そんなマドカさんの目に気圧されたのか俺は何も言えなかった。

212

重苦しい沈黙をやぶったのは彼女の方だった

マドカ「私……………右足の小指ないんだよね」

シゲ「え？」

彼女は悲しそうな笑顔をすると話を続けた

マドカ「ちょうど2年前で今のシゲくんと同じ年のころかなあ。

今と同じ大会前で部活終わった後みんなでふざけながら帰ってたのね。

そしたら横断歩道のトコでバイクに突っ込まれちゃって。

一緒にいた子は手にちよっとケガしたくらいで済んだんだけど私は倒れたバイクがちょうど右足にのっちゃってさ……………切断するしかなかったんだ。

けどね、それでも義指つけて、リハビリして、歩くのにはほとんど支障はなくなったんだけど……

もう長距離を走るのは無理だって宣告されちゃった」

——何も言えなかった、いや言うべき言葉が俺には見つからなかった。

マドカ「ごめんね、暗い話して」

シゲ「あ、いえ……別に」

マドカ「けど何でかわかんないんだけどけっこう前にカズヤくんにはばれちゃってるんだよねえ」「もしかして足悪いんすか?」って。私そういうのばれないようにしてたからこっちが驚いちゃって」

シゲ「意外とそういうの鋭いっすからね、あいつ」

(ホントにあいつマドカさんのことよく見てたんだな…)

マドカ「ね、カンがいいっていうかさ。あ、もう11時!?!ごめんね!これ以上遅くなるとお母さんが心配しちゃうから帰るね。たばこは20才からだぞう、背も伸びなくなっちゃうし(笑)」

シゲ「うるさいっすよ（笑）」

「あ、そーだ」

少し離れてからマドカさんは急に振り返った

シゲ「はい？」

マドカ「できないのにしたいのと、できるのにしたくないのってどっちが不幸なんだろうね？」

シゲ「え？」

マドカ「いや、やっぱなんでもないや。そういえば明日都心の方にミホ達、あ、友達たちと遊びに行くんだけどシゲくんも行く？」

シゲ「いやいや俺マドカさんの同級生の女子でそんなに知り合っていないすから。」

マドカ「あ、そっか陸上部でもOB、OGで顔だす子少ないもんねえ；それに高校生は学校あるかあ」

シゲ「いや遊びだったら学校休んでも行きますよ」

マドカ「こら！もうちょっと真面目になりなさい（笑）ああ！早く帰らないといけないんだった！じゃまた部活でね！」

そういつて彼女は早歩きで帰っていった、そう走ることではなく。

本当は聞こえていたあの言葉

『できないのにしたいのと、できるのにしたくないのってどっちが不幸なんだろうね？』

秋の星のきれいな夜の空。

明日も部活、早く寝ないといけないのはわかっているんだけど

その言葉は、そのあまりに難しい問いは俺を眠らせてはくれなかった

あいかわらずの朝。

もう戦闘機が飛んでいるのにもなれてきている俺がいて、きっと周りのやつらもそんなもんなだろうと思う。

あいかわらずのかったるい授業が終わって、

あいかわらずの部活が終わって、

(まあちよっとタイムが落ちてチカに怒られたりしたけど)

俺は部活から直でバイトにむかったカズヤを見送り、一人で家路につこうとしていた。

けど、いつもの曲がり角を曲がって俺の目にとびこんできたのはいつもの帰り道じゃなかったんだ。

『ゴゴゴゴゴゴゴ』

そこにあったのは無数の戦車。そして自衛隊かなんかの兵士達。

「東京方面の道は全て封鎖します。すみやかに近くの避難所に移動してください。繰り返します……」

「なんだ…これ」

「シゲ!！」

振り返るとそこには息を切らしたチカがいた

「ハアハア東京で…ハア空襲があつて…今日東京の方行つてた……マドカさんとも…携帯つながなくて………もうどうしていいかわからなくてえ……うつ、うわあああん」

そう言つてチカは座り込むと泣き出した

——なにかが狂い出していた。

俺の周りにあったなにかが音もたてずに崩れて、

俺はその変化についていけなくて。

なにかが狂い出していた。

俺の……日常がこわれていった

2章 たばこと星空の夜（後書き）

ひさびさにSSを書きました。この「君の空、僕の雨。」はちせ達の生きる世界でちせ達とは別の場所で生きている人達の話です。

ここまで読んでいただいた方に心からありがとうございます。では書くスピードは遅いですががんばるんでこれからもよろしくお願いします。

2006、9、22 AKI

3章 嘘のペンキ

小さい頃はヒーローになりたかった

強くて、かつこよくて、いつも誰かの為に闘って、

そんなヒーローにあこがれていたんだ

でも、俺はヒーローにはなれなかった。

俺には悪と闘う力なんてないし、まず闘うべき悪が見つからなかった

だから少しだけ強くなりたいと思ったんだ。

誰かは守れないけど自分の大切な人達だけは守りたい

そう思ったんだ。

——けど、俺は大切な人達さえ守れなかった。

初めて好きになった人も、自分の家族でさえも、

強く——強くなりたいんだ。いや強くなるんだ。

今度こそ守るんだ。きつとまだ間に合うんだ

たとえそれが間違った道だとしても

3—1

この小さな島国でおそらく最も人の集まる場所がついに戦争に巻き込まれた

被害者数不明、行方不明者数不明。

とりあえず数えきれないほどの人が死んだことは確かだった

——教科書の中だけだと思っていた世界が、今ここにあったんだ。

「うわあああん、あああん」

部屋にチカの泣き声が響く。

「だいじょぶだって。きつとどこかの避難所にいるって」

俺はさっきからそんなことしか言っていなかった。

「ひぐつ、でも、でもお」

ある女性が東京で行方不明になった

俺の部の先輩、俺の友達の初恋の相手、俺の幼なじみの姉貴分。

そう——マドカさんだ。

携帯は不通。災害ダイヤルはパンク状態。

実際マドカさんの生死はわからなかったが「生きている」とただ信じるにはあまりに状況は絶望的だった。

町の避難所である学校の体育館でその知らせを聞いたチカと後輩達はひどく取り乱し、泣き出す奴も多かった。

特にマドカさんと仲のよかったチカの取り乱し方は人一倍ひどくて手の施しようがないほどだった。

そんな中俺は1人ひどく落ち着いていた

——なんだか信じられなかった。昨日まであんなに元気だった人が突然いなくなったなんて認められなかったんだ

そんな事を考えている俺はある意味1番現実を受け入れていなかったのかもしれない

そんな中でカズヤも何も言わなかった。ただひたすら自分の掌が白くなるほどこぶしをにぎって、ただひたすら窓の外を見ていた。

結局、空襲から2日後俺達は避難所から出た。とりあえず安全が確認されたので学校にサイレンをつけ、それが鳴ったらすぐに避難することを条件にそれぞれの家に帰ることが許されたのだ。

みんな自分の家で荷物をまとめたり自分と関わりのあった人がいなくなってしまうたショックを少しでもやわらげたかったんだろう。

とりあえず俺は後輩達に別れを告げるとまだ情緒不安定なチカを家まで送って先に帰った家族のいる俺の家に向かった

「シゲ」

カズヤが立っていた

そしてあいつは俺に向かって何か言葉を口にした

いや何を言ったのかはわかってるけど

意味がわからなかった。

その言葉を理解したくなかった。

3
—
2

「俺東京に行く。もちろん自衛隊として」

たったそれだけの言葉が俺にはひどく重く聞こえた

カズヤ「そう決めたんだ。さっき首相さんが戦争が始まったことをラジオで言ってた。たぶんすぐにでも兵士の一般募集が始まると思うんだ」

シゲ「カ、カズヤ？」

カズヤ「だからまた学校が始まったらすぐに退学届出すつもりなんだ。ほらさ、やっぱそういうのちゃんとしときたいし…」

シゲ「カズヤ!!」

カズヤは動揺を隠そうともしない俺のそんな言葉にも顔を上げなかった

シゲ「は？　いったいおまえ何言ってるんだよ、まじで意味わかんないから。だいたい俺らみたいなガキがそんな兵隊なんかに…」

カズヤ「……………親父が死んだんだ」

シゲ「……………え？」

カズヤ「今日東京から避難してきた親父の同僚がさ、親父が死んだとこみたんだってさ……………それでその人が親父が持ってた時計とか手帳とか持ってきてくれたんだよ。でもそれ全部血がついてて…」

シゲ「……………（カズヤ、泣いてるのか？）」

カズヤはまだ顔を上げようとはしなかった。

カズヤ「それでうちの家で稼ぐ奴いなくなっちゃって、妹もいるし、俺が稼がなきゃいけないってんだけどこんな時に職なんかつけないだろうし、ほら兵隊になったらこれから始まる配給も他の奴等よりいいだろうしさー」

シゲ「そんな……………」

カズヤ「許せないんだ。」

シゲ「え?」

カズヤ「親父を殺した奴等が。そいつらがまだ生きてるってことも、それに……そんな中ただここにすることしかできない自分が」

シゲ「……………（カズヤ）」

カズヤ「それにまだ東京にいるかもしれない」

シゲ「……?」

カズヤ「どっかで怖くて、怖くててふるえてるかもしれないじゃないか」

シゲ「マドカさんのことか?」

カズヤ「守ってやりたいんだ。この1回だけでもいい。かっこつけだっって言われてもいい、守ってやりたいんだ」

シゲ「カズヤ……」

やっと上げたカズヤの顔には涙が流れた跡があった。

カズヤ「じゃ、それだけ。お前には言っとかないと思って」

カズヤは無理矢理笑ったような顔でそう言うともと来た道を帰っていった。

長年付き合ってきた仲だからわかる。本気だって。あいつがクサイセリフを言う時は決まってもいつも本気なんだ。

そしてあいつは今、本気で兵士になろうとしてる。

けどその時まだガキだった俺には、友達のそんな大きな覚悟の前にとってもじゃないけど「やめろ」となんて無責任なことを言えなかったんだ

3—3

そんなコトがあつてから3日がたたないうちに学校が始まった。まるで何もなかったかのように、何もなかったとしたいようにしてカズヤの話を聞いた後家に帰るとあいつの言った通りラジオで首相とその他政治家の奴らがこの国で戦争が始まったことを発表していた。また同時に配給性が始まること。避難へのこと。

そして自衛隊の一般募集が始まること。

俺の母親、父親もそれを熱心に聞いていて俺はそんな2人を無視して自分の部屋に入るとしばらく布団をかぶっていた。

チカ「おはよ…」

今までと変わらない教室。いつもと変わらない俺の席。

チカ「だいじょーぶ？顔色悪いよ？」

（それはお前に言いてーよ！！）

チカはあの事があってから具合がよさそうには見えなかった。顔色は悪いし、前から細かった体はよけいに細くみえて明らかに無理をしているのが見てとれた

シゲ「そうか？別に元気だが。それよりお前こそ大丈夫かよ？それ以上細くなると胸無すぎて陥没するぞ」

チカ「なっ！うるさいなーせっかく心配してやったのに！」

シゲ「そいつはありがとさん」

チカ「なっ！……この…チビ」

シゲ「チビ言うな」

少しでも元気をつけてやりたくて話をした。戦争のこと、特にマドカさんのことに触れないようにして。

けどそんな話の中、目の端に空席が写った

チカ「……今日もカズヤ来てないね」

そんな俺をみて察したのかチカはそんな事を言いだした

カズヤは学校が始まってからも1日も学校に来ていなかった。

あいつん家の近所のおばさんの話では親父さんの死で母親がひどく落ち込んでしまっていてそんな親をカズヤと中2の妹が必死に励ましているらしい。

教室を見回すと他にもポツポツと空席がありその中にもカズヤと同じように家族を失った奴もいるらしい

「ほらー席つけー授業は始めるぞー」

気がつくともマエじいが教卓に立っていた。

「やばい、次マエじいだっけー」

チカはそう言っていると早々と席についた

「――であるからして内積の公式は……」

前とんなら変わらない授業。戦争が始まった今、今まで以上にこんなことをしているのかという思いは募るのだけれども、教室の誰ひとりが、教師さえもがそこには触れなかった。いや触れられなかった。

けど、みんなのそんな振る舞いは

まるですぐ剥がれてしまうようなペンキを、

剥がれないように剥がさないように塗りなおしているようにしか見えなかった。

3章 嘘のペンキ（後書き）

えーと……ごめんなさい。どんだけ更新遅いんだ俺、この半年、
中学高校生活の部活最後の夏と色々忙しくって……と言いつつ、
訳がまし
いっすね。

ホントすいません；読んでる人少ないからって甘えすぎです俺；
ちなみに4章は書き終わってるんでそんなに時間を取らず出せると
思います

えーと文中読みにくい、意味わかんね、なんだこりゃといった文章
があったらゴメンナサイm（　　）m精進します

えーととりあえず4章タイトルは「それぞれの思うこと」ですまあ
内容は期待しないでください（汗

ではまた4章で；

最後にここまで読んでいただいた方。わざわざ感想をくださった方。
いつもわがままな俺のSSにつきあっていただいているちびさん、
本当にありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7884a/>

君の空、僕の雨。

2010年10月9日10時52分発行